

記念講演

立正佼成会の教化活動

齋 藤 安 彦

(立正佼成会教育部長)

年に一度の大きな研究会のお席に参らせていただきまして、この研究会の初めにお話をさせていただきます機会をお与えいただきましたことを、まずもって感謝申し上げます。

仏様の教えに基づいて立正佼成会という会を開かれたという意味で開祖、そして初代会長でございますので、庭野開祖会長と呼んでおりますが、庭野会長の指導のもとに、仏様の教えをもととした人間らしい生き方を少しく勉強させていただいている者の一人でございます。今日この席にお集まりの諸先生方は文字どおり仏教のプロでいらっしゃいます、その先生方の前にと素人が出てきて何か申させていただくわけで、大変緊張いたしております。

私どもは会が始まりましてまだ五十三年という大変短いものでございますので、いろいろ申し上げることに大変幼稚な部分がたくさんあるかと思いますが、先生方からご示唆ご教導賜ればありがたいと思うわけでございます。

過日、現代宗教研究所の所報『現代宗教研究』を頂戴して読ませいただきました中に、中部教区・愛知管区の蟹江先生の「立正佼成会、霊友会等々の教団は教祖中心の思想で、貧・病・争の現世利益に主眼が置かれた教団である。日蓮聖人は心の解決をお説きくださっている。にもかかわらず、お題目を唱えながらも論理性に欠ける。その意味で

は日蓮聖人の視野に欠けている。立正佼成会、創価学会はそんな教団である」というようなお言葉がございました。ご指摘の趣旨、よく噛みしめました。そんな意味では、今日のテーマとしていただきました「教化活動」という言葉に当てはまるような専門的なものはないわけで、私の申し上げることが不十分なことに終わるかとも思うのですが、レジュメの順序に従ってご説明をさせていただきたいと思えます。

一、「教え」について

立正佼成会は久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊を本尊とし、法華三部経を所依の經典とする。

立正佼成会は法華経を信解し、菩薩道を実践せしめることを本義とし、人格完成を期せしめるとともに家庭、社会、国家、世界を平和境とすることを目的とする。(会規より)

幾つか他にも項目があるのでございますが、現在、会が宗教法人としてお届けしている団体といたしまして、会の規則にうたっております会のありようでございます。

次に、「教主は釈尊・根本仏教と法華経・在家仏教の精神に立脚する・生活即仏教・入会者即布教者」。これは、法華経をよりどころとし、久遠の釈尊を本尊とする立正佼成会のありようについて、庭野会長のお言葉を少しくご紹介申し上げます。ここに幾つか項目を掲げたわけでございます。

教主は釈尊

私ども立正佼成会の会員・信者は、妙法蓮華経という仏様のみ教えを日蓮聖人が大衆化をしてくださった、そして、命を張って国家諫暁をされながら、法華経の救いをお題目を通して広めてくださったということで、釈尊のこと、日蓮聖人のことも学ぶのでございますが、目の前において私どもに生きる示唆、また、仏教の何たるかを説いてくださった方は、やはり会を開かれた開祖、初代会長でございます。そんな意味では、蟹江先生のご指摘のとおり、教

祖中心という形にどうしても集団活動の焦点がいくわけでございます。

会長の言葉を引用させていただきます。

「会長の教えとか、恩師の教えとかと言われておりますが、会長が説いたわけでもなければ、亡くなられた妙俊先生（注：会は昭和十三年に、庭野日敬、長沼妙俊というコンビで「大日本立正交成会」としてスタートいたしております）が説かれたものでもありません。私はいつも立正交成会には教祖はないと申しておりますが、仏教徒である以上は教祖であるお釈迦様の教えを体していくことが大切なのであると、こう申し上げているのです。」

先程申し上げた会の規則にもうたわれておりますような意味で、法華経の教えを信解し、菩薩道を行う、法華経の教えに従って日々の生活の中で実践をしていく、その実践を通して、ひいては家庭から社会、国家、世界の平和境をつくっていく。ここに釈尊の本義があるということでございます。

庭野会長は、昭和十三年に会を立てる前に、霊友会に入会しております。これが昭和九年のことです。

霊友会に入会したことを契機として、出会いました当時の霊友会の支部長であった新井助信氏は、漢学者であられましたので、恐らくは法華経の経典を宗教的な感覚で読んだというよりも、漢学的な感覚で読破したものと察せられるのでございますが、法華経を読み終わったときに、中風で寝たきりの動けなかった体が、しゃんとして元氣になったという体験の持ち主でいらっしゃいます。

庭野会長は、それまでも修験道をやりましたり、九星とか方位とかをマスターして、人様の人生相談に乗るようなことやら、家相などを見て、人を助ける道に多少は入っていたわけですが、新井助信氏の説かれる法華経の講義を聞いて、それこそ琴線に触れたとも言いますしうか、新井助信という師匠から学んだ法華経こそ、一〇〇%の救いということ、一つの目覚めを得たわけでございます。

そういう意味では、庭野会長の今日の法華経をよりどころとした教えの立て方の根本は、たくさんある経典の中で

最もすぐれた經典の一つである法華經に、釈尊の本意がすべて込められているということと、あわせて、釈尊の説かれたあらゆる教えを生かすことによって、真の人づくりと寂光土づくりができるという確信を持って、会を始めたわけでございます。

そんな意味では、現実に悩める人を救うということとあわせて、真の仏教というものが人間生活にとって生きる知恵であり、人生の指針でもあるということで、あえて少し口はばったことを申し上げさせていただくならば、仏教にたくさんの宗旨宗派はあってもその究極は全部釈尊の願い、あるいは釈尊の悟りを、今日の世界の中に具現化するためにあるという視点に立っております。仏教の根源である釈尊の精神に戻ろう、そして法華經は、真の人間の生きる道を示しているものとして、菩薩道という少し偉そうなことになりましたが、在家の場でありながら人様の救いのために、また法華經のより弘通のためにということに、開祖の願いがあるわけでございます。

先程申しましたように、私どもは会長指導のもとに、いろいろなことを実践し、行為をさせていただいて、それなりのご利益を感じておりますので、とかく「会長の教え」とか、「会長のおかげさま」みたいな言葉になってまいるのでございます。

今、読み上げましたのは会長の昭和三十五年頃の少し古い言葉ですけれども、教えは会長が説いたわけでもない。要は、立正佼成会には教祖はないんだ。あえて教祖は誰かと言われれば、それはお釈迦様であるというのが、立正佼成会の基本でございます。

根本仏教と法華經

会長が新井助信氏から学ばれた中身は、法華三部經——無量義經・觀普賢經を含めました妙法蓮華經二十八品の講義を受けたわけですが、その中に今日的な分類で言われますところの根本仏教をいろいろな角度で教示を受けまして、特に今日でも法華三部經を所依の經典とするということでございますけれども、この根本仏教的な場での教えを

用いて、具体的な一人ひとりの人間の教化、あるいは悩み事の解決ということに活用をさせていただいております。そんな意味で、会長の言葉を読ませていただきます。

「仏教というものをごく平易に申し上げますと、それは極めて私どもの身近にあって、どうしても守らなくてはならない、しかもそれによって幸せになれるという教えであります。

逆に、私どもが不幸せになることもまた身近にあります。仏教の法則をよく取り扱うか悪く取り扱うかによって、善因善果か悪因悪果に分かれてまいります。

私どもが幸福になろうとすれば、道場観（神力品にある言葉でございますが）に説かれておりますように、今いるここが道場である、自分の家庭が道場であるという生き方にならなくてはなりません。」

「過去において法華経を信仰した人たちは、とかく四諦の法門や、あるいは八正道とか、十二因縁ということは小乗仏教の教えであって、愚かなものだと考えがちでありました。」

「仏教の理論で言えば、まず根本仏教ないしは原始仏教を学んでから法華経を唱へ、その法華経の精神を通して見ていくならば、すべてのものを生かしていけるのです。仏の法門というのは、そのようにあらゆる宗教の教義の違ったものまでも、それを生かす法が、はつきりとしています。」

法華経をよりどころとするということでございますけれども、具体的には、四諦、八正道、十二因縁という法門を法華経の精神をもって活用するということが、教化の原理になっているわけでございます。

在家仏教の精神に立脚する

お釈迦様のお悟りになられた一つの経緯を私どもなりに学ばせていただいていることからまいりますと、かようなこともそれこそ文字どおり釈迦に説法なことになりますけれども、釈尊は俗世を離れ、難行苦行十一年とか、学説的に難行苦行六年とかと教えていただくわけでございますが、難行苦行の上に新たな悟りを開かれて、仏の道を説き

明かされたということでございます。難行苦行そのものが釈尊の大きいなる悟りにとって益のないことではなかったというところでございます。

また、増谷文雄博士のお話を私どもお伺いいたしました。お釈迦様の悟りというのは、決して難行苦行のあげく悟った悟りという言い方は当たらない。むしろ難行苦行をお捨てになった。難行苦行の中には人間を生かす真の悟りはなかった。なるがゆえに難行苦行を捨てられ、尼連禪河で体を清め、乳粥をもらい受け、体力をつけたあげくに菩提樹下に座られた。菩提樹はたくさん葉を茂らせた大きな木であり、吉祥草を敷物にして、その上に端座すること一日間とか、あるいは七日とか、現代風に言えば、インドという猛暑の地で、冷房完備の部屋で、フワフワとしたマットレスの上でお釈迦様は悟りを開いたという言い方ができるのだという講義を伺ったことがあるのでございます。私どもが会長を通して教えていただいております法華経の行じ方も、そこに意味があるわけでございます。あえて言えば、俗世の中にあつて仕事を持ち、あるいは学業を持ち、あるいは家庭の中に主婦としてある、それぞれのいる場所、場所、そのところどころの中で、それぞれなりの悟りを開き、それぞれなりの法をつかみ、それぞれなりの実践をし、それぞれなりの体験を通して、人様の幸せのために貢献できる人間に高まろうというものでございます。

そんな意味で、在家仏教に対しても会長の言葉を一言読ませていただきたいと思います。

「正法弘通の菩薩行に貫かれた在家仏教が立正佼成会の教えです。在家仏教こそお釈迦様の付囑に添いたてまつることができるとあります。我が立正佼成会の存在価値はここにあるのです。我々こそ在家仏教の新しい時代をつくる開拓者とならなければなりません。新しい夜明けの先頭を走る選手となりたいたいものであります。」(要旨)

「世界を本当に平和な寂光土にしていくなめには、まず在家の者が仏教を体得しなければなりません。私どもが人間仏教、在家仏教の精神に立脚して教えを生活に生かしていけない限り、仏教の持つ本当の意義を果たすことはできないのです。」

お釈迦様は仏・法・僧の三宝を非常に尊ばれました。そして、お釈迦様の時代から言われてきましたのは、中でも最も重要な役割を果たすのは僧宝であるという解釈ですが、私どもはこれを拡大解釈いたしまして、この教団に入っている皆さん方による僧伽ということだけにとどめず、万民を僧伽の一員としてこの僧宝に加え、仏様のみ教えを基盤にした生活をともに続けていきたいと願っているのであります。」

いささか大風呂敷的にお聞きになっていただくかとも思うのですが、仏・法・僧の三宝ということを、仏、そのみ仏の説かれた教え、そして、私どもの立場から見れば専従でいらっしゃる僧侶方という意味で、仏・僧を一つとらえているわけでございます。その僧宝というものを、もう一面、同信の仲間ということで、仏の教えを行ずる仲間としての僧伽ととらえております。

さらに、この会長の言葉にありますように、この世に生きとし生けるものすべてが、心に内在している仏心があるという意味では、すべてを僧伽の一員という視点で一人ひとりの人をとらえて、ともどもにお互い同士が見つけ合い、僧伽の一員としてお互いが磨き合っていくということでございます。常に専門家の皆様における仏様の教えの伝統的な伝承ということと合わせて、私どもは至らない立場でありながら、在家は在家の立場で真の釈尊の本意を把握し、実践していくということが教えられているわけでございます。

生活即仏教

生活即仏教ということは、神力品のほんのわずかな一節を引用して、「すなわちこれ道場なり。諸仏ここにおいて法輪を転じ、諸仏ここにおいて般涅槃したまう」と。「ここに」という、この場所、私どもの生活のひとこまひとこまの場、そこが即道場。言うなれば、仏の教えを実践する場ということにとらえさせていただくわけであります。

そんな意味では、ある時間だけが仏の教えに触れ、ある場だけが仏の教えを学ぶ場ということではなくて、生活をするところがすべて仏の教えを学び、また、仏の教えを行じ、時に仏の教えを伝える場であるということにおいて、

生活即仏教ととらえているわけでございます。

入会者即布教者

今日、立正佼成会の中にも、会の規則で「布教者」「布教師」という言葉がございます。言うなれば教えを伝える側の役割を持つ者という意味での布教師でございます。そんな意味では伝える人、受ける人というのが相対的になっ てしまうわけでございますが、基本的には入会者即布教者ということの第一の意味は、真の教えをつかむ、真の真理をつかむとも言いますか、あるいは生活即仏教と言われます意味で、仏の教えを真に自分のものにしようとす るならば、学問的に学んでいく、あるいは先輩からその道について教えを伝え聞くというのみではなく、わかっ たらわかったなりに、また、わからなければわからないなりに、単純な言葉で申し上げれば、人の世話をしつつ、み ずからが成長させていただくということに、真の仏様の教えの悟りがあるということでございます。立正佼成会には 布教師資格があるわけでございますけれども、今日新しく信者として立正佼成会のメンバーになった人間は、それが 何の勉強もなく、何の資格もなく、要は、資格のあるなしにかかわらず、人様を救う側に立ってその教えを学びなさ いるということでございます。

たとえて申し上げれば、これはごく自然のことであろうと思うのでございますが、若い娘さんが結婚し、お子さん が生まれますが、どうやって妊娠をし、十カ月をどう過ごし、オギャーと生まれてきてからどういうふうにすれば子 育てのできる親になり得るか、三歳になったら親たる者はどうすべきか、八歳になったらどうすべきか等々、すべて マスターし終わってから初めて結婚をし、妊娠し、子育てに入る親というのは一人もいないわけでございます。気が ついたときは妊娠をし、気がついたときは親になっていたわけでございます。親たる者はもとと親だから親では なくて、子供を産んだ瞬間に初めて親になっていくわけです、子育てをしながら、子供も成長するわけですから親ど も、親も親なりに、子供を通して親らしく成長をしていく。これは当たり前な生きざまであろうと思うわけござい

ます。

そんな意味で、何かがわかって、何かがマスターできて、何かの悟りが開かれてから、その中身を人に伝えるということの大事さもさることながら、子育てにおける親の立場のように、未熟ながら、その子供を手がけつつ、子供も育つわけですけれども、親も親らしくなっていく。「子を持って子の恩を知り、子を持って親の恩を知る」という言葉もございますが、要は、子供を持つことによって本当の親のありがたさがわかってくる。また、子供を持ってみると、かけがいのない愛らしい子供によって親として生きている喜びを味わわせていただく。親は子供から喜びを与えられ、また、子供を持って初めて自分を育ててくれた親への感謝ができるというようなことも、当然な世の中の動きの中にあるわけでございます。

そんな意味で、立正佼成会においては入会者即布教者ということ、一人ひとりがそれなりの毎日毎日の実践の中で、人様の救いのために心配りをする事の中で、人様のお世話をしようという日常の活動の中で、真の仏法を身につけていこうということが言われるわけでございます。

一面、私どもは会長の深い慈悲心がここにあらわされているとも受け取るのでございます。先程も申し上げましたけれども、会を開かれた庭野日敬開祖は、新潟県の山村生まれでございますが、成人少し前に上京して、あちらこちらで奉公をし、戦時中召集を受け、その後も漬物屋とか煮豆屋の商売をしながら、人様の相談にあずかり、悩みを解決する道を学んだわけでございますが、新井助信という法華経の師匠に出会ったことにしましては、もったいなくて、ともかくにも三年間必死になって師匠のところへ暇を見ては通って、法華経を学び、その中には四諦、八正道、十二因縁等々の大変細かい根本仏教のような教説に対する教えも受けたのであります。

とにかく必死になって、三年間、経典を学んだわけでございますから、立正佼成会を法華経という経典をもとにして立てた会長の立場から言うなれば、この法華経がいかに大事なものであり、また、いかに深いものであるかという

ことはよくわかってるわけでございます。ですから、今日入会してきたような物のわからないいかげんな者が、もっともらしい顔をして立正佼成会の一員として布教に当たったのでは、何をしゃべり、何を説き、どんな誤解を生じさせるかわからない。ある程度のを学習し、ある程度のものがわかり、会長が間違いないと、それこそ法印を押しただけが教師であるというような意味においては、それが本当に苦勞して学んだものであればあるほど、中途半端な生かじりで立正佼成会の布教者のような顔をして人様に立正佼成会を勧めるようなことは、むしろもつてのほかであると言われても、当然であろうかと思えます。

しかし、会長は信者即布教者だと。今日入会してきたあなたが、まず人様に心を向けて自分の救われということもさることながら、人の救いということに視点を変えた立場で生活をしてごらん下さい。何か一つありがたいと思ったり、ありがたいことを人様にしてあげなさいということ委ねられること自体、私も弟子の側で言わせていただくならば、それほどに師匠に信頼をされている、わけのわからない者に教えを説いてよろしいということに、み仏の慈悲を感じるのでございます。

そんな意味では、人様へのお心配りをしていくうちに、教えが身についてくるということが、実際の体験の中にたくさんあるわけでございまして、入会者即布教者ということが、立正佼成会の中では通常用いられているわけでございまして、これが一つの教えの形とでも申し上げることができるかと思うのでございます。

二、「布教組織」について

今日の立正佼成会の布教組織は、ある程度行政的な組織に合わせて組織活動をいたしております。東京は二十三区でございますが、その二十三区の一つ一つに、大田区であれば大田区を一つの包括範囲とした大田教会という組織を持っております。

その下に支部がありまして、その下に地区という組織があり、その下に会員という形がとられております。

会員

レジユメの会員のところに平成二年末二二万三、七二二世帯とございます。立正佼成会の実際の会員数は、先月末現在、約二一七万世帯になりましたので、今年になりましてから六万世帯ばかりふえております。今日、一世帯平均が三人弱になりましたので、会員数という数え方をいたしますと六五〇万人という言われ方をいたしますが、立正佼成会は個人で会員登録をしておりません。世帯登録ということでございますので、二二二万三、七二二世帯、これが昨年末の数字でございます。

班

会員さんの面倒を見るといいますか、入会者即布教者でございますので、一会員も即布教者であられるわけでございますけれども、組織的にピラミッドのような形で形成しております、大体十人ぐらいの単位の会員を班という組織でとらえております。

地区

三〇五班ぐらいを組という単位でとらえ、三〇五ぐらいの組を地区という形でとらえております。地区には主任という役のついた在家のリーダーがおります。これが一万八、八八四人でございます（世帯ではありません）。

支部

地区の上の組織といたしましては、支部がございまして、ここには支部長というのがあります。これも全部在家者でございます、全国で二、三八六名おります。

教会

支部の上に教会があります。これが伝統仏教さんのお立場で言えばお寺のような建物を持っている一つの中心の場

所でございますが、これが日本の国内に二二二ございまして、レジュメに二二六と書いてございますのは、ブラジル、ロサンゼルス、ハワイ、サンフランシスコ、ニューヨークという海外の教会を含めての数でございます。

道場

教会の拠点となるところを道場と名づけております。その道場の出先に、法座所とか連絡所とか地域道場とかというのがございまして、寺院さんの建物的な教会道場が二二二、地域道場——これは借用しているところもございまして、四三九の拠点がございます。教会道場は延べ床五千坪という大きなものが二つあります。全国の教会道場は平均して大体二五〇坪ぐらいでございまして、決して大きな建物ではございません。小は一五坪から、やや大きいのは八〇〇坪ぐらいでございます。そういう教会道場が各地域にございます。恐らく皆様のご近所にも立正佼成会〇〇教会という看板の上がった道場があらうかと思えます。

本部と専従職員

以上のような各機関を本部で統轄をしているわけでございます。

立正佼成会の専従職員、言うなれば給料を得て生活しておりますのは一、一三六人でございます。そのうち、二二二六ある教会の教会長という役割を持っております者が含まれておりますので、実際に本部で事務的その他もろもろの仕事に従事している職員数は、約九〇〇人で、これが本部の諸機関を運営しております。

教会と名づけますところは、小さくは一教会が二千数百世帯を包括しているところと、一番大きな教会は横浜教会ですが、一人の教会長が約五万世帯の会員の面倒を見ているわけでございます。

横浜教会は、駅の西口に横浜教会普門館という九階建ての建物を持っておりますので、設備的なこと、空調的なことを含めた職員が必要でございますので、ここには本部職員の一、一三六人のうちの十人ほどが専従者として横浜教会におります。

支部長・主任

支部長とか、地区を受け持っております主任と呼んでいる方は合わせて二万人強の数になります。これらの方は、月のうち二十日から二十五日ぐらいを、教会を中心として準専従者のみに動いておりますが、全部、自分で交通費を払って教会に通い、人様のお家をめぐり、「手取り」という言葉を立正佼成会で使いますが、一軒一軒の信者のお家の状況を見て、必要があれば、そのお家でのご供養をさせていただく導師役もこの在家の人たちが務めております。

さらに、先端組織の組、班を入れますと、もっと多くの数になるわけですが、少なくとも今日現在、この瞬間にも全国二三六の拠点、さらには出先の三〇〇近い拠点で二万人ほどの在家者が、朝から晩まで人様のお役に立つというところで動いているというところでございます。

略史

方便時代、真実顕現時代、普門示現時代と区切っております。

方便時代というのは、昭和十三年に立正佼成会ができてから昭和三十二年までを言います。これは、会を創立してから二十年間は方便時代としてやるぞと会長が命名して修行したわけではなくて、歴史を遡ってみれば、この二十年間は方便時代と呼べるのではないかというわけであります。

そういう意味で、昭和三十三年から昭和五十二年までを真実顕現時代と申しております。お手元の会議資料の三十四頁以降に、明日、立正佼成会をお訪ねくださるということで、概略のご案内をしていただいている部分がございます。これは松野純孝先生の『新宗教辞典』、三原正資さんのレポート「立正佼成会」から抜粋してくださったというところでございますが、恐れ多いのでございますが、いささかご訂正願いたいところがあります。三十六頁をお開きいただきたいと思います。上から五行目から、

翌年五月、最初の本部道場を落成し、本部を杉並区和田本町七〇九に移した。妙佼没後、昭和三十三年一月、庭野は真実顕現を宣言し法華経信奉教団に向うことを決めた。三十五年六月一日、妙佼追慕の意味をもこめて、会の名称を変更し、「交」を「佼」に改め、立正佼成会とし、

とありますが、「庭野は真実顕現を宣言し法華経信奉教団に向うことを決めた」のではなく、先程来申し上げておりますとおり、また、この資料の前の頁にも出ておりますが、法華経信奉教団は会を創立したときの会長の意図でございましたので、「真実顕現を宣言し法華経信奉教団に向うことを決めた」というのは、ちょっと私どもは理解できない表現でございます。

方便時代という言葉が使われておりますのは、当時、副会長でありました、長沼妙佼にいろいろ神様の啓示がありまして、「神様からのお言葉」というのがこの二十年間に非常に頻繁にあったわけでございます。そんな中で、昭和二十年に久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊を本尊とせよという指導があったわけがあります。

それまでは、霊友会から別れてまいりましたので、会長が霊友会当時いただいた曼荼羅を掲げ、神様の指導で守護神として毘沙門天王を祀りなさいと言われたり、大日如来を祀りなさいと言われたりいたした経緯がございます。

昭和二十年に久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊を本尊とせよということで、ご尊牌と呼んでおりますが、会長が木の札にそれを書き、お厨子に納めて、昭和二十年から本尊を久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊と決めてまいったわけでございます。

その後もご宝前の勧請形式は、日蓮聖人のお書きになった「お曼荼羅さま」を会長が謹写いたしましたものを中央に掲げておりました。そんな点では、昭和二十年に本尊をということございましたけれども、どちらかといえば「お曼荼羅さま」をご宝前を中心に安置して、私ども信者の目から見ますと、ある意味ではご本尊が「お曼荼羅さま」であるがごとき形で来たわけでございます。

「真実顕現の宣言」というのは、昭和二十年に勧請されておりました久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊こそが、我が教団の本尊である。立正佼成会は、それなるがゆえに会の創立の大きなよりどころであつた法華経をもととした教団であるということを変更して内外に宣言をしたのが、この「真実の顕現」でございます。

そんな意味で、法華経の中心である久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊を立て、しっかりと法華経をよりどころとした学習あるいは布教を明確にするという宣言をしたのが、昭和三十三年であつたわけでございます。

なお、資料の三十六頁の真中に「本尊」という項があつて、

〔本尊〕久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊、久遠実成大恩教主釈迦牟尼仏。略して、久遠本仏、本仏釈尊、本仏ともいう。佼成会がこのように本尊をきめたのは、昭和三十三年一月一日、そのことを内外に宣言してからである。と書いてあるのも、今申し上げましたような意味で誤解でございます。立正佼成会が本尊を決めたのは昭和二十一年十一月十五日でございます。

それまでには幾多の変遷があつたということで、

霊友会から独立したところは、霊友会教団当時から祀っていた「お曼荼羅」と、毘沙門天王を守護神として勧請。十五年から中央に「南無妙法蓮華経」、右に「天壤無窮」、左に「異体同心」。十七年から、毘沙門天に代えて、大日如来を守護神に。二十年十月から、日蓮によって凶顕された大曼荼羅であつた。

と書いてあります。これは、昭和二十三年二月に立正佼成会の本部拝殿が落慶いたしました。そのときに、会長が日蓮聖人によって凶顕されたお曼荼羅を謹写させていただいて、中央に勧請したわけであります。

そして、久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊の尊像、つまり仏像として形あるものとしてあらわしたものは、昭和三十三年、大聖堂が出来上がった年でございます。明日、大聖堂へお越しいただきますとわかりますが、中央に安置してございます。

法華經の実践教団として会を創立して以来、人様の救いとか教化に当たってまいったわけですけれども、昭和三十二年に至る二十年間というのは、会長が実際に導いた、言うなれば導きの子供ということになるわけですが、副会長の長沼妙佼の霊的な指導の中で、いろいろ執り行われてきたものがたくさんございまして、その意味で、方便時代と呼んでおります。

そして、真実顕現ということ、昭和三十三年、本尊を明らかに宣言すると同時に、会長の法華經の解釈を改めて著書としてあらわされたのも三十三年以降でございます。実際には昭和二十五年当時も法華經の講義を一握りの幹部にはいたしておりましたし、昭和二十五年八月から会の機関誌「佼成」が発刊されておりますが、それにも「法華經講義」を会長が載せてはおりますが、戦前・戦中・戦後の混乱期は貧・病・争にあふれていた時代なるがゆえに、法華經の祈り、願いであるところの家庭をもとし、一人ひとりの人格を磨くことを通し、ひいては世界平和という真の法華經の本義に沿った教化ができにくい社会状況の中にあつては、むしろ副会長の妙佼先生が表に立って、立止佼成会の布教が行われてきた時代ということが言えるかと思ひます。

昭和三十三年以降、この間、会長が温めてきた法華經の基本的なあるべき姿を、幹部、多くの信者に公開をし、新しい活動に進んだわけで、これを真実顕現時代と呼んでおります。

さらに昭和五十三年からを普門示現時代と呼び方をいたしております。

要は、最初に申し上げましたように、釈尊の説かれた教えの本義は、今日南に流れ、北に流れている大きな流れもあります。小乗、大乘的な流れもあります。あるいは宗旨宗派的な分れもございましょう。しかし、願うところ、祈るところ、その釈尊の本義に帰れという意味においては、観世音菩薩普門品の中に示されておりますように、普く門あまねということ、言いかえれば門はないということございまして、あの門、この門ではない、すべての門は一つである。ともかくにも教えを自分たちだけのものにしてしまふ、自分たちの独特のものとして保つという、いい意味の

独自性の大切さと同時に、普く門を開き、ともに真の人類の救い、あるいは世界平和への貢献という意味において、観世音菩薩普門品の示すところの観世音の救いのごとく、観世音菩薩の三十三身ではございませんけれども、あらゆる形を示して、寂光土を築いていこうということをおきなスローガンとして標榜して、会の活動を進める時代が昭和五十二年以来今日に至っているわけで、これを普門示現の時代と申しているわけでございます。

三、「教化活動」の実際——「行」

最初にお断り申し上げましたとおり、教化活動ということをお申ししても、立派なことをしているものは何もありません。信者即布教者という言葉に象徴されるように、全く素人で仏法などはあまりよくわからない、また専門的な学習もしていない者が、それぞれに究極の願いであるところの大調和した社会・世界、そして家庭づくり、幸せの人づくりということを目指しての実践を幾つかいたしております。

(1) 生活即仏教・仏教即生活の立場から

先祖供養

立正佼成会に導かれた一信者が、まずなすべき一つの実践行といたしまして、先祖供養・お当番修行・法座修行・ご命日参拝・団参修行がございませう。

先祖供養というのは、立正佼成会に入会いたしますと、「総戒名」という、一見、神社のお札のようなものを授与されます。これは「総戒名」という名前のおと、個別の戒名ではなくて、私ども一人ひとりの人間は父親があつて、母親があつて我があるという、当たり前のことでございますが、父方の先祖、母方の先祖を総じてお祀り申し上げるという意味で、「総戒名」と名づけております。

私は齋藤と申しますが、私の母は春名という家から嫁に来ておりますので、齋藤・春名両家の先祖を総じて、一つ

のペーパーの中に祀りまして、朝夕、法華経を抜粋した經典を通して先祖回向ということで、自分の言葉で読経供養をすることから、信者修行の出發をいたします。

読経供養というのは、これは先生方にかようなことを申し上げるまでもないわけですが、先祖のもらもろの祈りの結晶が今日生きている私も一人ひとりでございますので、先祖への感謝ということが一つ、そして、霊界におります先祖の成仏を祈るということが一つ、さらに、先祖がいろいろな輪廻を繰り返すわけでございますので、やがてこの娑婆に再び生を受けるときは、法華経に縁のあるところに生まれていただきたいという祈りを込めた先祖回向がございます。

同時に、先祖回向をみずからがさせていただくということによって、やがては私たち一人ひとりも子孫に対しては先祖になっていくわけでございます。子々孫々に誇りの持てる先祖になっていくという意味において、我が身、我が言葉を通して先祖に回向をさせていただく。ひいては、み仏に対し報恩感謝の気持ちをあらわし、あわせて朝に夕にささやかながら世界の平和を祈るところに、先祖供養の実践行があるわけでございます。

そんな意味で、生きている先祖は両親でございますから、親への孝養という気持ちを起こすためにも、先祖供養をさせていただくわけでございます。

お当番修行

子どもの立場から、よくお寺さんへお邪魔をいたしますけれども、大変清潔に、それこそご住職さんが率先して朝早くからご寺内の清掃奉仕をなさいます。仏のお座りくださるところであられるからこそ、清浄にといいお気持ちであるとは察いたしますし、あわせて、仏のもとへのお参りに通ってくるご信徒さんの方々を清く場を整えてお迎えするという意味において、ご清掃をなさっておられると思うのでございます。

子どもの当番修行というのも、実はそのことでございます。道場荘厳という言葉がございますが、建物をきれい

につくり、美しく彩り、飾るといふことの大事さと同時に、その荘厳を築く者はやはり人であろうかと思うわけでございます。

立正佼成会の大聖堂を初めとして幾つかの建物、施設の中には、プロにお願いしなければ清掃が行き届かないところもありますので、多少清掃会社にお願ひしている部分もございますが、全国の教会道場では、ご宝前をきれいに整えると同時に、たくさんの信者が当番修行といふことで、奉仕で教会の建物の清掃を行っております。

また、清掃を行うだけではなくて、玄関に立ちまして、たすきをかけて、おいでになる方を合掌でお迎えをさせていただきますといふことをいたしております。

これを当番修行と言っておりますが、この修行によって建物をきれいに保っておくといふことは、み仏を尊ぶといふことと同時に、道場へ参拝に来る人たちの一人ひとりを菩薩と思つて合掌でお迎えすることが、本当の意味での道場荘厳であろうかと思ひます。私どもが道場の門をくぐりましようといふ、あるいはまだ何もわからない人が玄関をくぐつて参りましようとも、時には犬が一匹入つてこようとも、玄関でたすきをかけて合掌でお迎えをする。仏に仕えるといふことは、一人ひとりの心の中にある仏の心に仕えていくといふことであろうかとも思ふのでございます。

そういうことで、お当番修行がありまして、誘ひ合つては、あるときには玄関に立つて合掌してお迎えし、あるときにはトイレの清掃のお役をするといふことで、常に清浄に保たせていただく。それは仏に仕えるがごとく、お参りにくる一人ひとりの心を清浄にしていくといふ道場における行が、即、化他行にもなっていくといふことでございます。

法座修行

これは立正佼成会において一つの大きな特徴だといふ言い方もできますし、会長の言葉を引くならば、

「立正佼成会がどうしてこんなにどんどんと発展するのだと多くの方々注目して下さることがあるわけござ

いますが、そのときに、いつも何と答えるかといえば、立正佼成会は法華経をよりどころとして教えを立ててきたことと、法座修行というものを信者、そしてお互い同士の磨き合いの場としてきたからだ。」

と申しております。この法座という場が立正佼成会の教化、また育成の大きな基点になっております。

これは単純に申し上げますと、先程来申しましたように、教会には専従のプロは教会長一人でございますので、この一人が全部を賄うわけにまいりませんので、先程申しました、約二、三〇〇人の支部長とか、一万八、〇〇〇人ほどの主任が法座主を務めます。

今の道場はほとんどじゅうたん敷きでございますが、昔は畳敷きの道場でした。そこに十人、十五人、時には五十人、八十人が輪をつくりまして、先輩の支部長とか主任がその中心に座り、グループカウンセリングのような形で法座をつくります。

この法座は、今日は高齢者がふえてまいりましたので、高齢者ばかりが集まる法座とか、時には男は男でなければ話がわからんというようなことで、男子壮年のグループの法座とか、あるいは若い者は若い者でなければ話が通じないということ、青年のための法座というように、年齢層とか性別による法座も多少はございますけれども、原則的には老若男女を問わず一つの法座の中で、先輩から話を聞き、悩みのある人は悩みを打ち明ける。打ち明けた悩みについては、先輩は自分の学んだこと、経験したこと、あるいは会長指導の中から得た仏法をよりどころに助言し、それを受けて帰り、生活の場での実践し、その実践したものを持ち寄っては体験を語り、時には新しい悩みを訴え、それに対してお互い同士が助言をし合うというわけでございます。

そんな意味では、カウンセラーという専門家がクライアントに専門的な立場から触れ合うということよりも、むしろ、ちょうど昔の家族と同じように、兄や姉が弟、妹をおぶって子育てをしていくような、家庭の中における人間育成の場とも言ったらよろしいんでしょうか、上の子が下の子の面倒を見ていくという形で、法座が組まれておりま

す。

ですから、「遠くの身内より近くの他人」という言葉がございしますが、立正佼成会の法座という場所は、教えを求めてくる人にとっては、そこにいるのは専門家でないがゆえに、かえって気楽に話が出せるわけです。身近な他人的な集まりではありますが、とらわれなく自分自身の本音をそこで吐き、悩みのある人はその悩みをざっくばらんに全部訴えられるという雰囲気を持っていて、真剣に信仰を求めている人たちがお互い同士で役に立ち合おうという場でございます。

老若男女の差もないということでございますから、時に、ある人の訴えが、自分にとっては全く関係ないことで、我関せずという場面もございます。

例えば、私が初めて立正佼成会の法座に座りましたのは、高校二年生、十七歳のときでした。昭和二十五年のことです。世の中はまだまだ大変混乱期で、朝鮮戦争が始まって少し景気がよくなりかかってきたような時代でございました。ですから、大変貧乏暮らしのさなかの方、仕事がなくて、あぶれている方もいらっしゃれば、中にはその当時から裕福に暮らしている方もいらっしゃいました。

そういう中で、十七歳の人間が、三十代、四十代の大人の方々の悩み、苦しみの話題の中に座っていても、ピンと来る話はほとんどない状態でした。ある方の話を聞いていると、立正佼成会に入る前にこんな人にだまされた、あんな人にだまされたと訴えます。それに対して、立正佼成会では、法座という場では「むすび」ということが行われますが、先輩さんが自分の体験を話されたり、あるいは法華経なり、仏教における八正道、六波羅蜜など、人間の行くべき一つの道を教えてくださる。

「あなたは人にだまされるんだから、だまされる以上は、あなた自身が意識しているとしていないとにかかわらず、どこかで人様をだましているものがあるんじゃないか。むしろ、あなたをだました人のところへ行つて、その人自身

を導いてきなさい。だました人を恨むのではなく、これを契機として、その人が仏の道に入れるようにしてごらんやう。」

というような指導を受ける。私なんかから見ると、自分をだました人のところへどなり込みに行きなさいというなら理に合っているけれども、立正佼成会に入るように導いていらっしやいなんで、おかしいんじゃないかと思ったことがありました（今日、両者とも大きく事業をされています）。

このように、法座の中で行われている話を一般常識的に考えますと、不合理極まりないやりとりが、かなりございます。

例えばの話ですけれども、大変お金に困っていて、あしたの食べるのにも不自由しているという人がいましたら、「あなた、今、幾ら持っている。その半分を仏様にお布施して帰きなさい」と言っている。貧乏で困っている人間の財布から半分出させていいのだろうかと思っただこともあるわけです。

しかし、仏法の道理とでも言いましょうか、世の中の因果とでも申しましょうか、今日、振り返ってみるならば、それこそ「貧すれば貧する」という言葉がありますように、貧しき者は貧しいなりに執着が大きいわけでございます、その執着を離れたところに本当の安穩があるということが、今ならわかるわけですけれども、当時十七歳の少年にとっては、一見、不合理でございました。

なかには、「主人が飲んだくれで困ります。毎晩十二時前に帰ってきたことがあります」という悩みに対して、どうやってブツ飛ばせばいいか教えてあげますということが幹部から話されるのかなと思うと、「旦那が酔っぱらって帰ってきたら、もう一本お酒を飲ませてあげなさい」と言っている。「冗談じゃない、表で飲んできた人間に、また奥さんが家でお銚子一本つけるなんて、それこそ踏んだり蹴ったりじゃないかと思ってその話を聞いたのでございます。

外で一杯ひっかけて、へべれけになって帰ってくるご主人に対して、奥さんが飲んだくれと違って夫婦生活を続けている限り、その家に調和は生まれてこないわけでございます。飲んでくれのご主人ですら今生で縁あって出会って夫婦のちぎりを持ったわけで、女としての自分がさらに謙虚にもう一步下がりが得る人格を身につけたときに、「三界は我が有なり、その中の衆生はことごとく我が子なり」の仏の境地に高まっていくわけです。

このように、一見、泥棒に追い銭じゃないかというようなりとりが、この法座の中ではたくさんございます。しかし、謙虚に下がって、実際にのんだくれた亭主に、ねむい目をこすりながら料理をつくり、お銚子を温めて飲ませることを三日、五日続けているうちに、旦那がすっかり酒が嫌いになったという例が、法座という場を通して百も二百も千も展開されております。

そんなことがどうしてあるんだろうかと思うようなことが、事実ございます。子供に背かれた、不良息子になった、どうすればいいんだろうという悩みに対しては、「自分が子供時代の親不孝を思い起こしてごらん下さい。それを親におわびし、自分が改めて幸福な人間になるために、今まで以上に心を込めて読経供養をし、人様の救いのために尽くしなさい」と答え、そうした結果、子供がまともになったという例もたくさんございます。

そんな意味では、法華経が教えてくださる基本的な人間の奥底にある仏性とでも申しましょうか、仏の心に自分がいつ立ち返るか。言うなれば、より多くの時間、その仏心をあらわしていけるか、六道から遠ざかり、少なくとも四聖と言われる声聞の領域あるいは縁覚の領域、菩薩の領域、ひいては仏の領域に自分の身を置くことができるか。だまされたら、だまされ続け、だました人を愛していくということを、この法座の中では先輩が自分の体験を含めて伝授してくださるわけでございます。それを素直に聞いた人たちが、それを実践し自分の体験としていき、自信を持って「だまされることを許せる人間になれ」と言い切ることもできるようになるわけでございます。

論理的にとりよりも、体験的なやりとりがこの法座という場では多いわけでございます。そんなサークルの中で

は、年齢差もあれば、境遇の差、男女の差もありますから、わけのわからない、通じ合わない、また、つまらないこととで悩んでいるなということも、たくさんのお悩みの中では出てまいるのですけれども、年齢、性、境遇の区別のない中でのやりとりが、むしろ大人が子供の心を知り、子供が大人の心を知り、あるいは男性が女性の心を、女性が男性の心を知り、それぞれの悩みを心広くお互いが聞き、助言をし合ったりという中で、言うなれば人格を整えていく修行が、この法座という場で出来上がっているということを申し上げることができるかと思うのでございます。

そんな意味で、同信者が胸襟を開いて話し合う場が法座だという言い方もできますし、また、人を思いやるということでも助言をさせていただければ、そこは何よりの菩薩行の場だと言うことができます。あるいはまた、自分だけが不幸だと思っていたのに、悩める人がこんなに多かったということを知ったという意味においては、法座の中で安心をし、生きる心強さを把握することができる場でもあるということが言えようかとも思うのでございます。

ご命日参拜

皆様方には明日、私どもにお越しいただくわけでございますが、立正佼成会では明日五日を虚空蔵菩薩のご命日という名前でお呼びしております。虚空蔵菩薩は副会長であった長沼妙佼家の守護神でございます。また、二十八日は会長庭野家の守護神を祀った日でございます。それから、十五日はお釈迦様の涅槃の日でございます。ですから、このご命日は、人がお亡くなりになった日というより、ご縁日と申し上げたらよろしいんでしょうか、そんな意味で、月のうち五日、十日、十四日、十五日、二十八日をご命日と呼んでおります。

この日には法座だけでなく、説法会が行われる日でございます。私はこんなことで悩んでおりました、入会して、こんなふうに法座で指導をいただきました、こんなことを実践いたしました、今こうなっておりますという体験を発表する場が、ご命日でございます。家庭環境も違えば、年齢差もあるわけですから、同じ悩みを持ったから一〇〇%

同じようにすればいいわけではありませんけれども、体験説法の中から一つの因果の道理を学び、あるいは自分にとっての人生生活の示唆をいただくということになるかと思えます。

団参修行

私どもは南無妙法蓮華経を唱えておりますので、昭和二十年代の後半、日蓮ご聖人様のお徳を慕って身延山とか小湊に団体参拝をいたしたことがございます。そんなところから団体でお互いさまが学び合う、朝から晩までが法座修行というようなことで団体修行が始まっております。

しかし、昭和三十九年に大聖堂ができてから、ここに本尊がきちっとした形で勧請されましたので、全国に散らばっております会員が、大聖堂を目指して団体参拝に来るようになり、今日、団参修行というのは主に地方会員の本部大聖堂への団体修行という形になっております。

会員は年に一遍は大聖堂へということをし、うたい文句にいたしておりまして、二二三万世帯の人が、年に一度はということをお願いしております。現実には、地方から大聖堂へお参りに来る人は約三十万人でございます。世帯数でいきますと恐らく二十数万世帯ということでございましょうから、会員世帯の一割程度が大聖堂へ来ているというのが実態でございます。そういう団参修行をするというのも、一つの修行でございます。

(2) 入会者即布教者の立場から

お導き修行、手取り修行

私どもが新しいメンバーに入会のお誘いをするをお導き修行と言っております。

そして、導かれた仲間のところへ、お互いの状況を確認をしに行く、あるいは今申し上げましたご命日にお参りに行きましょう、私たちの地域ではお当番修行をする日が何月何日に決まりましたので、一緒に出ましょうというようなことを伝達に行きながら、相手様の状況をつかみ、そこに問題があれば一緒に悩んで、助言をさせていただく

ということを、手取り修行と呼んでおります。

以上、先祖の供養から当番修行、法座修行、ご命日修行、団參修行、お導き修行、手取り修行の各種の修行について申し上げましたが、これらの修行を全部次々に行う方もいれば、ご供養しましょうと言ってもなかなか先祖回向の読経供養のできないような立場の信者もおります。二一三万世帯の中には、種々の修行の仕方がございますから、全部が全部徹底しているわけではございません。

布施行

立正佼成会に入りまして、教えていただくのは、人をお救いするという身の行のほかに、財的な布施行をさせていただくということも、大事な実践行として挙げる事ができます。

先程も申し上げましたが、執着が大きい者ほど貧しき者であります。貧しいがゆえに執着心が強くなるわけでございまして、これを取り除いていき、より豊かな人間性を築くという意味においても、大事なのは財的な布施行でございまして、こんなことも、必要に応じてお参りの折々にお布施をするようにということをお勧めします。

実は私は入会いたします前は曹洞禅宗の檀家でございまして、現在は墓地を移してしまいましたので、直接かかわりはなくなってしまうましたが、当時、そのお寺さんに対しても、お彼岸あるいはお盆にお経をあげてくださったときには、大変少額なお布施しかしておりませんでした。しかし、立正佼成会の中で指導されたことは、ご僧侶に尊いお経をあげていただくことは、我々素人があげるお経の何層倍ものご利益を先祖は喜んで受けているんだから、先祖にかわってしっかりしたお布施をするんですよという事であります。

立正佼成会に入会したから立正佼成会にお布施することも教えられましたけれども、旦那寺のご僧侶に対してお布施することを教えられませんでした。あるいはまた、お寺の祀り事といいますがあまりご縁がない。お坊さんのお説教なんかもおもしろくないなんて、私どもは正直思っておりましたが、立正佼成会に入会してから、お寺さんでの行

事にはきちんと参加をしないと云われますから、お寺さんの行事にも参加いたしますし、折々にお布施もさせていただきますし、お墓をきれいにすることも教えてもらいました。そんな点では、行的な修行を含めた中で、仏様のみに触れた人間らしくさせていただくことがあるうかと思いません。

ここにお集まりの先生方の檀信徒さんの中にも、恐らく立正佼成会の会員になっている人がいようかと思えます。立正佼成会の会員は、お墓をお守りくださり、先祖代々をずっとお守りくださったお寺さんを大事にするんですよという指導をされているはずでございます。そんな意味では、あまりお寺を大事にしない立正佼成会の会員の檀家がいると思ったら、どうぞ「立正佼成会の会長はどう教えているんだ」と、聞いてやっていただきたいと思えます。立正佼成会の会員はもっともとお寺さんとかお墓を大事にし、きちんとした布施を今まで以上に、言っているはずでございますので、お寺を大事にするようにという指導が行き届いておりませんでしたら、「間違いないおれは本部の教育部長から聞いてきたんだ」ということで、お布施の少ないところには、「もっとお布施を出せ」とはっきり言っていただいで結構でございますので、はばかりなくご指導を賜わればと思うわけでございます。

四、「教化活動」の実際——「学」

(1) 制度的な教育

布教師教育

法華経の教義を学ぶ一つのルートとして、布教師という資格がございます。主に会長の法華経の解釈を中心に、あるいは三部経典を通して勉強するのが、布教師の主な教育内容でございます。

学 林

昭和三十九年にスタートいたしました立正佼成会の専従者の教育機関であります。

私は教団で教育部長という役を仰せつかっておりますが、そもそも仏道を志して立正佼成会へ飛び込んだのではなくて、母親の病気をきっかけとして入会をいたしました。母親は病気が治ってから一生懸命になりました。母親がなぜ一生懸命になったのか。私は、自分の病気が治ってありがたいから、母親は、毎日、立正佼成会へ通ったのかと思ったら、治らなくて苦労していた病気が治ったのは、立正佼成会には何か秘伝があるに違いない。そういう秘術をどこかで受け取る日があるのではないだろうか。そんな秘術を教える日があったら、聞き逃しては大変だということで、毎日、立正佼成会へ通ったわけでございます。しかし、何の秘伝もないわけでした、法座の中で「むすび」の言葉があったわけでございます。

私の母親は昭和十四年に後家になりましたから、戦中・戦後、大変苦労いたしました。だから、病気になりました。しかし、その母親の病気が治ったというのは、あえて言えば、心から合掌し、朝夕に亡き夫に供養するという生活の中で、心と態度の生活が軌道に乗ったから、順調な体に戻ったということでございます。医者や薬や祈りでは治らなかったものが、立正佼成会の生活の中で治ったことは事実でございます。

母親がそうだったからといって、私は別にありがたくも何ともないわけでございますから、毎日、立正佼成会に通う母親は、とうとう宗教ボケがしてしまっただかというので、近所の皆さんに、何とか母親のボケをとめていただくようにと、お願いをしていたわけですが、いつの日か、「おまえも来てみたら」なんて言われて、行ってみたら、全然私のイメージと立正佼成会は違うものですから、何となく通っているうちに、それが毎日となり、その後、専従者になったようなわけでございます。

ですから、私の信仰は動機不純でございますして、「あなたは何で立正佼成会へ来るようになったの」と聞かれたら、よくわかんないけど、とにかく行ってみたら、何となくいい雰囲気だから、毎日、行っているうちに、「専従者になれ」と言われたから、「そうですか」と言って専従者になった。専従者になったけれども、初めは給料が出るわけ

も何でもありません。当時は、あしたからどうやって暮らすかといったって、父親が残した商売を家内と母親でやっておりましたから、細々食いつなぎながら毎日通っているうちに、多少、「交通費だよ」と言っていたのがそもそも始まりでございます。そんな意味では動機不純の「何となく」が始まりでございますから、真剣に法華經を学んでとか、仏道を修行してなんていう意識よりも、開祖が教えてくださる教え、あるいは信者の話しますご命日の体験説法なんかを聞きかじりしては、人様に話をしてみたら、その人がまた救われたという経験の中から、こんな何もわからない人間でも、現に人様を悩み苦しみの淵から救い上げることができたという、私の目の前の人とのかわりに法華經の生きた姿を見て、そんな繰り返しの今日があるわけでございます。

立正佼成会は信者が即布教者と申しました。会長自身も「私は尋常小学校しか出ていない。新井助信先生から三年間法華經を学んだだけだ」ということを言いますが、仏教学的な意味ではプロフェッショナルでもないわけでございます。創立当初から系統立てた幹部教育の機関のないまま教団はやってきたわけですけれども、世間様に責任のある教団活動をしなければならぬということで、年間十人ほどの学卒者を教育する機関を設けて、社会的識見を含めた、専門的仏教徒と呼ぶにふさわしい人づくりをしようということで、昭和三十九年に学林の制度がスタートしたわけでございます。先程申しました専従職員一、一三六人のうちの約二〇〇人は、学林を卒林した者でございます、そういった多少専門的な知識を得た人間が、今、育成されつつある過程でございます。

(2) その他の教育

その他の教育といたしましては、青年層教育・家庭教育・教育者教育・社会福祉講座・カウンセラー養成講座がございます。

(3) 平和学習

平和学習としては、人権問題に対する学習会があります。

また、「青年の翼」というのがありますが、これは青年たちが海外とか沖縄の戦跡、長崎・広島の被爆地を訪ねて、実際的な学習をする場でございます。

五、教化活動の一環としての社会活動

明るい社会づくり運動

これは庭野会長が、全国の市町村に至るまで、それぞれの地域の方々が宗教のあるなしにかかわらず、その心の奥底の善意を結集して明るい社会をつくっていくということを提唱したことに伴っての運動でございます。そこへ会員は一市民として参加をいたしております。

一食を捧げる運動

新宗教の一つで、青森に本部がございます松緑神道大和山という教団がございますが、ここの教主様が提唱された「一食を捧げる運動」というのがございます。

これは世の中には豊かに食べ過ぎている人間もいれば飢えに苦しんでいる人たちが三分の一はいる。その飢えに苦しんでいる人たちの飢えを味わうということで、月のうち幾日間か一食を抜き、食べたつもりでそのお金を捧げて寄付をするということで、「一食献金」ということをなさっております。そのご提唱を受けて、立正佼成会では、一食を抜いたつもり、食べたつもり、コーヒーを飲んだつもりのお金が、教団へのお布施とは別に、「平和基金」として年間約四億円ほど集まってまいります。

ユニセフ募金

さらにこの一食運動を、単に立正佼成会とか、宗教に携わる者とかということだけではなくて、世間の皆様にもご参加いただこうということで、戦後、日本はユニセフのお世話になって子供たちが成育をいたしましたので、「ユニ

セフ募金」ということで、五月の青年の日（第三日曜日）に、全国の二三〇の教会、あるいは四〇〇〇の地域道場を中心に、街頭に立って青年たちが主体になって、「一食を捧げる運動」を広めるとともに、一食抜いたつもりで献金をしてくださいということで募金をいたします。この募金は昭和五十四年から始めておりますが、毎年二億円から三億円を一般の方々からご寄附をいただいております。そっくりユニセフに差し上げております。昭和五十四年から今年までの総額は、三七億三、〇〇〇万円ほどになっております。

こうした運動は、私どもは法華経の教えを受けた者として、菩薩行として、自分の人格の完成という大きな目標に向けて、多くの方々呼びかけていくという教化活動の一つとして行っているわけでございます。

六、その他

ここで、ご紹介したい作文がございます。

長野県には五つの教会がございますが、長野の教会がスタートして四十周年ということで、先月八月二十五日、更埴文化会館と長野県民会館の二カ所で会員の集いを行い、両会場で三千七、八百人の会員が集まりましたが、そこで発表された長野南支部の小林佐和子さんという高校二年生の作文でございます。

先程申しました青年の教育の一環として、「青年の翼」というのがありまして、小林さんは、その学習会の行事として、今年の夏、沖縄の戦跡を訪ねました。長いので、抜粋して読ませていただきます。

八月六日から九日までの四日間、第一回長野県「高校生の翼」の平和学習に参加し、私たちは日本で初めて地上戦の行われた沖縄に行かせていただきました。

向こうに着いてから三日間の生活の中で、旧海軍司令部壕、守礼門、県立博物館等を見学し、平和学習ということで立正佼成会沖縄教会の二人の方から（注……ひめゆり部隊と同じような経験をなさった方が会員の中にい

らっしゃいます) 戦争体験を話していただきました。

また、次の日には、長野県の慰霊塔、黎明之塔、健児之塔、ひめゆりの塔、資料館、そして、糸数壕等々を参拝し、花束、折り鶴、お線香、ろうそくを捧げて慰霊の供養をしてみました。

特に印象に残ったのは糸数壕で、壕内は真っ暗で、懐中電灯で照らしていても薄暗く、上から水滴がポタポタ垂れてくるので、足元が滑りやすくてとても大変でした。その中で明かりを全部消して、今、自分が立っているその場で死んでいった当時の多くの人たちの思いにならせていただきながら、全員で「ふるさと」を合唱しました。

私は最初、一生懸命お国のために働いて傷ついた兵隊さんばかりが、ここで死んでいったのかと思ったら、本当は沖繩の市民の方々が大部分であった、本土の人を守るということと自分の命を守ることさえできず、暗く湿っていたこの壕の中で死んでいかなければならなかった。そういう人たちのことを考えると、戦争というのは本当に関係のない人たちまで巻き込んで、大切な命を簡単に奪ってしまうものだと思うと、悲しくて涙が出てくる思いがしました。

私がこの「高校生の翼」の学習会に参加して一番感じたことは、私が戦争の悲惨な体験を見て、ただ、かわいそうという気持ちだけでなく、私はこの人たちが本土にアメリカ軍を送らないために、みずからの命を顧みず必死で頑張ってくれたから、そのころの私のご先祖様が生きていられたのだし、今、私が生きているのだと思います。

死んでいった人たちは、自分たちの慰霊の供養をしてもらうことを望んで死んでいったのではなく、自分たちの子孫に二度とこんな経験に遭わせたくないという気持ちで死んでいきました。もし、場所や時代が違ったら、私や私の両親や友達もそのように死んでいったのかもしれない。

その意味で、そういう人たちのために平和な世界をつくっていかねばならない。その平和な世界をつくっていくことがその方に対する一番の供養だと思いました。

私が、この「高校生の翼」に参加させていただくまで、自分の命は自分のものだし、誰のものでもないんだから、他人にとやかく言われる必要はない、生きようが死のうが、そんなことは自分の勝手だし、だれが何と言ってもその意思は変わらない、そう思っていました。自殺しようとは思わなかったけれど、しようとする人のわけが、とてもバカげたことでない限り、何とか理解のできることなら、それを理解してあげよう、そんな感じでした。

でも、今、この「高校生の翼」に参加させていただいて、自殺しようとする人の気持ちを理解なんかしていかない。納得のいく説得ができるかどうかはともかく、それをとめるように努力しなければいけない。一生懸命つなげてきて、私に受け継がれたこの命は、私だけのものじゃない。長い間、ご先祖様が必死でつなげてきてくれたこの尊い命を、私も次の世代へつなげていかなければならない。そう思わせていただきました。

そして、家に帰ってこの気持ちを伝えようと思ってご宝前でお参りをして、お母さんに「ありがとうございます」と言ったら、次に何の言葉も出てきませんでした。「あんたは何も決意してこなかったの」と言われて、呆然としてしまいました。そこで、兄に「おまえ、何も感じて帰ってこなかったのか」と言われました。

「いや、私はご先祖様に感謝することができて、平和の大切さ、命の尊さを学んだ。この気持ちを少しでも多くの人にお分けしたい」

と言ったところ、兄は、

「おまえはすぐ他人、他人と言うけれど、平和というのは、まずどこから生まれるんだ。それに、おまえに一番近いご先祖様はお母さんなんだぞ」

私はその言葉を聞くまで、すっかり忘れていました。平和はまず家庭から、そして、社会、国家となるわけです。私は単に戦争が起きないように早く平和な社会ができますようにと思っていました。でも、家庭がバラバラでは社会が平和になるわけはありません。

それに、私の一番近いご先祖様は両親であり、父母のおかげで私が生まれてきました。そして、母が今まで一生懸命頑張ってきてくれたので、私がかつて大きくくなりました。そして、皆さんに少しでも、お役に立てる私になりました。それは私自身の努力もほんのちょっぴりあったかもしれないけれど、母の力がなければ私はずっと死んでいました。

私の両親が離婚したのは小学校三年のときです。そのころ一人ぼっちにされたら、今はもう生きていなかったかもしれないし、きょうだい三人そろっていても、たぶん死んでしまったと思います。私は母に感謝の言葉だけで、行動をなかなか起こせなかったことを、とても情けなく思います。せっかく決意したことも、自分に弱かったり、当たり前になると簡単にできなくなったり、忘れたりします。そういうことを少しでも抑えて、母に感謝しながら、それを行動に起こせるような自分になっていきたいです。

これからは、多くの同世代の高校生に、この体験をお分けさせていただき、二度と戦争のない平和な世界になるよう、足元の小さな平和から実践させていただきたいと思います。

これは高校二年生が沖繩の戦跡をめぐって帰ってきたときの生の感想の作文でございます。

ご主人と別れたお母さんが、立正佼成会の中でささやかな先祖回向をし、三人の子供を育ててきた。そういう環境の中で育った高校二年生の女の子が、沖繩の戦跡をめぐって感じてきたものは、ご先祖から受け継いだ尊い命というものと、戦争で亡くなった方々が何を喜ぶか、私たちがしっかりと平和をつくることだ。そして身近には自分の親に形ある孝行をしていくことが、何よりの平和づくりだということであったわけでございます。

私があえてこの作文を読みましたのは、立正佼成会の教えの中で、法華経の本当の祈りは、お釈迦様の説かれたよ
うな意味で、真の人づくりであり、平和へ貢献できる菩薩づくりであろうかと思うからでございます。在家の私ども
が生意気なことを言えるものは何もありませんけれども、この作文に象徴されるような意味で、出会うきっかけを通
しながら、自分を悟り、そして命をつないでくださったご先祖様に感謝申し上げます。そんな意味では、仏法が二
千五百年の昔に説かれ、それが永々と今日まで受けつがれてきたのは、先師先哲、そして、今日の伝統諸仏教諸派の
皆様方のそれこそ身命を打ち投げたご信心のおかげさまで、私どもも端くれながら、仏の教えの隅に置いていただ
いている一人であるわけでございます。

大変まとまらないことを申し上げ、かえって混乱を招いてしまったかと思いますが、ご清聴を感謝申し上げます。
ありがとうございました。

(拍手)